

東洋は14歳頃から、父震沢を見習い江戸本所で漢方に基づいて内科、外科の医療を行っていた。しかし、蘭方医学を修めたい気持ちが強くなり、家計が苦しい中ではあったが父に相談の上、何とか佐倉の順天堂塾に入門できた。安政4年（1856）の春、東洋16歳の時である。

東洋自ら記録した「東洋手記」には、「安政三年 下総佐倉に佐藤泰然先生を訪ひ余を入門せしめ學資を給与せらりたり。是れ杏雲堂の今日ある所以にて慈愛の深き意志の堅き感泣するの外無し。明治二十七年四月二日没す、時に齡八十四歳なり（父震沢を指す）」との記載がある。

佐倉順天堂は、蘭方医として名高い佐藤泰然⁽¹⁾が、佐倉藩主堀田正睦の招きで江戸から移住し、天保14年（1843）に開設したものである。東洋は、この塾でオランダ語で学ぶ原書生として勉学を開始したが、初歩を学ぶための辞書もさらには原書も極めて手に入りやすく大変な苦勞をした。「東洋手記」によれば、文法を学んでもまだあたかも「霧中に座するが如し」であったという。安政5年からは学資に充てるため上総、下総で巡回種痘をして収入を得たり、過度の勉学から体調を崩し江戸本所の自宅で療養せざるを得なかった。

回復後佐倉順天堂に戻ったのは、万延元年（1860）10月末であったが、その頃、佐藤泰然の養嗣子である佐藤尚中⁽²⁾は、藩主の許可を得てオランダ医学を学ぶため長崎へ旅立とうとしていた。東洋はオランダ医学を学ぶいい機会であると思い、佐藤尚中に随行することを懇請して認められた。東洋手記に、「当時長崎へ遊学するは維新後に於て欧米に留学するよりは億劫に覺へたり」とあるように、長崎に行くことは海外に出かけることに匹敵する大事だったのである。

費用として何とか30両を親戚縁者から集めた東洋は、万延元年11月12日、佐藤尚中門下生で随行を許可された関寛齋⁽³⁾ら5人と共に江戸から長崎へ出立した。「泰然先生は退隠し尚中先生当主となり長崎遊学を志され藩主の許可を得たるなり。余随行を請ふ。同窓中其許可を得たる者は加藤陶齋（後林と改む）、児嶋朴仙、関寛齋なり。寛齋は、尚中先生の用達兼会計の任を兼ねたり。其他に福井藩医益田宗三、外に同藩医壺人なり」とある。東海道を下り、伊勢神宮参拝をし、京都に出て淀川を大阪に下った。ここから船で瀬戸内海を経て馬関（下関）へ着き、小舟に乗り換え九州に上陸、その後は陸路をとり、長崎には12月21日に到着、松本良順⁽⁴⁾が滞在していた宿舎の寺町興福寺に入った。

当時の長崎には、安政4年9月に来日したボンペ（朋百）⁽⁵⁾が、長崎に来た松本良順を塾頭とする門下生にオランダ医学の教授を開始していた。松本軍医頭を介して塾生となった人々の名前が「登録人名小記」として残っている。それによれば、ボンペが帰国する文政2年10月までに135名が入門している。

その中に、「江戸本所人万延庚申之冬入門 佐々木東洋」の他、上記佐倉順天堂からの5名の記載があり、一同が万延元年の冬に到着し入門したことが明らかである。（なお、「東洋手記」に「同藩医壺人」とあるのは、この一覧から、魚住順方であることが分かった）。なお万延元年の入塾生は、入澤恭平⁽⁶⁾、長與専齋⁽⁷⁾など総数53人であった。塾生の多くは各藩の侍医で豊富な藩費を持参して来ていて、東洋等佐倉順天堂からの貧乏書生とは生活程度が違い交流はなかった。因みに、同期には、松平肥後臣、松平越前臣、島津出雲臣などに所属する医師たちがいる。

ボンペの講義には通訳が付かず、しかもこれまで聞いていた日本人のオランダ語発音は参考にならず、学習は困難を極めた。一講義の間に、一語しか理解できなかったこと

もあると記している。しかし、既にポンペは幕府から死体解剖の許可を得ており、東洋も門下生の一人として解剖を学んだ。

その後不幸なことにある時、東洋は所持金を盗られてしまった。やむを得ず、大切なオランダ語辞書を売り払ったり、筆耕をして凌いだが間に合わない。そこで、長崎から近い天草で医業につきその収入を学資に充てようと思い立ち、同窓の入澤恭平に相談した。彼は小曾根乾堂⁸⁾に、東洋の天草行きに添え書きを依頼した。この事情を知った佐藤尚中は、強く帰郷を勧め、それが聞けないなら絶交するとまで言った。ところがそこへ偶々父震沢から手紙に添えて15両の送金があり、この留学の前途が有望だと思えば、さらに学資を送ると知らせてきた。一方、松本良順の進めていた養生所（後に精得館と改称、長崎医大の前身）の建設がはかどらず外来患者の診察も出来ない有様であったので、東洋は考え抜いた末ついに佐藤尚中の言いつけに従って帰郷することを決心した。

長崎から江戸への帰路は、「九州黒崎（福岡県北九州市若松区黒崎）より乗船し、風災を四国多度津港（香川県多度津町）に避け、夜を冒して讃州金比羅宮（香川県仲多度郡琴平町）に参詣し、大坂を経て東海道により、文久元年十二月下浣（下旬）帰宅せり」とある。

長崎滞在中の東洋に関する第三者の記録としては、佐倉順天堂から同行した関寛斎が残した「長崎在学日記」が有益であり、東洋の生活の一端が覗えて面白い。関寛斎は、万延元年12月から文久2年11月まで約2年長崎に滞在したが、日記は、万延元年12月23日から文久2年1月7日までが記録されている。以下に、東洋に関する部分を転記するが、原文は漢字カナ混じり文である。

文久元年

三月二日 曇 同前

「…………夜に入りて直に眠らんと欲するに 頭痛して眠ること能わす 由て五つ時より佐々木を誘て石灰町に至り善哉を喫し 帰后熟眠す 外気に触るるに由て頭痛去る」

三月九日 晴

「午前の課を欠く 昨夕長野（謙山）君 佐々木君牛頭を齎し来り 由て頭を剖て脳を観す…………八つ時に終る」（解剖のための人体は少なかったので、牛や猫を解剖することが多かった。牛肉は料理屋に持って行き食し、美味だとの記載がある）

三月十四日 晴

「…………夜に入り鬱気 善哉餅を喫す 佐々木東洋君と薬性学の対読を初む 但し午後一時」

四月三日 日曜日

「長嶺氏を案内として昨日より佐々木と相約して三崎行を催す 暁を侵して起て晴る 明らんする時微雨忽ち晴る 朝課を終り行囊を作す 佐々木氏を待つ 然れども来らず 故に彼の旅宿を訪ひ未だ朝食を喫せずと暫時待つに又雨す 然れども雨を侵して発途す…………」

（この散策は一泊二日でその詳細な経路が記録されおり、長崎半島の南端、脇岬にあるみさきの観音と呼ばれる曹洞宗の寺に通じる参詣道、みさき道を歩いたものと推測される。）

七月七日

「レス（授業のこと）止む 午后より逍遙して鏝を求め 又江戸町にて蘭画二枚を求む 佐々木氏に金一両二十を渡す」（東洋は関寛斎から蘭画の代金を借りたのだろうか）

八月二日

「…………十二枚の内二枚佐藤 一枚佐々木…………」（枚とは蘭画のことか）

なおその後、関寛齋が東洋と会ったことが、その「家日誌抄」に見える。江戸に帰ってからの東洋は、深川、本所など数カ所で開業をした後、東京府大病院、大学東校、博愛社で勤務医となっていた。

明治5年11月18日

「東京着 佐藤 佐々木 松本 林等を尋て向來の病院の交代人を探索す……」
(山梨県立病院の人事のこと)

明治6年6月10日

「逗留中日々佐藤 佐々木両家へ行 診察を傍観す」(当時、亀沢町で開業していた)
このように、東洋の長崎留学滞在期間はほんの一年弱で、語学の問題もありオランダ医学の修得は甚だ本意であったと思われる。しかも経済的にも苦勞があり、東洋にとって長崎留学はよき思い出ではなかったのではなからうか。しかし、東洋はその経験を無駄にすることなく、後にドイツ語、英語を独力で学び、明治4年にはジョンストン「解体生理図説」(英語)、明治10年には、シュミット「内科提綱」全6巻(ドイツ語)を翻訳出版している。因みに、明治5年には自らの「診法要略」を出版したが、日本語で書かれた最初の打診、聴診の教科書として医師や医学生に愛読されたのであった。
(終)

人物解説

(1)佐藤泰然

文化元年(1804) - 明治5年(1872)。相模国川崎生まれ。1835年、長崎に留学。1838年、両国薬研堀に「和田塾」を開く。1843年、佐倉藩主堀田正睦の招きで江戸から佐倉に移住。病院兼蘭医学塾「佐倉順天堂」を開設、順天堂医院の始まりとなる。

(2)佐藤尚中(舜海)

文政10年(1827) - 明治15年(1882)。下総國小見川に山口甫僊の次男として生まれる。1842年、佐藤泰然の和田塾に入り、のち養子となる。1860年から1年余り長崎でポンペに学ぶ。1873年、順天堂医院を開設。

(3)関寛齋

文政13年(1830) - 大正元年(1912)。上総国生まれ。佐倉順天堂で学んだ後、銚子で開業。1860年から佐藤尚中らと長崎でポンペに学ぶ。帰国後、徳島藩典医となる。戊辰戦争に軍医として参加、以後徳島で開業。1902年、北海道陸別町の開拓事業を開始。

(4)松本良順(松本順・蘭疇・楽痴)

天保3年(1832) - 明治40年(1907)。佐藤泰然の次男として江戸に生まれ、のち松本良甫の養子となる。1857年から5年間長崎に留学しポンペにオランダ医学を学ぶ。江戸に戻り、医学所頭取、將軍侍医を務め、明治維新後、軍医総監。司馬遼太郎の「胡蝶の夢」、吉村昭「暁の旅人」に詳しく描かれている。

(5)ポンペ(ヨハネス・ポンペ・ファン・メーデルフォールト)

1829-1908年。オランダ海軍の軍医。安政4年(1857年)に来日し、文久2年(1862年)までの5年間に多くの日本人にオランダ医学を伝えた。「ポンペ日本滞在看聞記 - 日本における五年間」(沼田次郎、荒瀬進共訳、異国叢書：雄松堂出版、1978年)がある。

(6)入澤恭平

天保2年(1831) - 明治7年(1874)。越後生まれ。1860年、長崎に留学しポンペにオランダ医学を学ぶ。帰国後、郷里で開業し、のちに陸軍1等軍医副。「長崎遊学 道中日記」を残した。

(7)長與専齋

天保9年(1838) - 明治35年(1902)。肥前生まれ。大坂適塾を経て、1861年長崎に留学しポンペにオランダ医学を学ぶ。1871年、岩倉遣欧使節団の一員として渡欧。1874年、文部省医務局長に就任、東京医学校校長を兼務。東京司薬場(国立医薬品食品衛生研究所の前身)を創設。1875年、衛生局初代局長に就任。のち、元老院議員、貴族院議員、宮中顧問官、中央衛生会長などを歴任。

(8)小曾根乾堂

文政11年(1828) - 明治18年(1885)。肥前生まれ。幕末から明治へかけて有名な篆刻家。明治政府の勅命により御璽・国璽を刻した。長崎にいた勝海舟、坂本龍馬などの世話もした事業家としても知られる。

参考資料

- 1.東洋手記
- 2.長崎大学医学百年史、長崎大学医学部、1961
- 3.ポンペ；日本滞在看聞記—日本における五年間、雄松堂書店、1968
- 4.順天堂史 上、順天堂、1980
- 5.杏雲堂病院百年史、(財)佐々木研究所、1983
- 6.ポンペ：日本近代医学の父、宮永孝、筑摩書房、1985
- 7.関寛齋 長崎在学日記、陸別町史 通史編別巻、1994
- 8.蘭学全盛時代と蘭疇の生涯、鈴木要吾、大空社、1994
- 9.長崎遊学者事典、平松勘治、溪水社、1999
- 10.ながさきの空、江戸期の「みさき道」、医学生関寛齋日記の推定ルート (http://www.n-brabra.com/bura/info/sky/2005_09.html)